

B. 完了相と時制の一致

(1) 完了相

「接続法には二つの形がある。伝統的に、接続法現在と接続法過去と呼ばれてきたものである。ただし、両者の区別は時制よりも法に多く関係している。」(『現代英語文法大学編・新版』P.75-3-23 接続法の形態)

この説に立つといわゆる仮定法過去完了という項目を仮定法過去から独立した立場で考えなくてよいことになり、さらには直説法過去完了も直説法過去として扱えることになり、英文法をよりシンプルなものにできる。

の両者は正真正銘『叙述法』であり、『“Indicating” Moodと称すべく、Indicativeの名はこれ等の場合に最も相応しく、『直接去』といふ我が国に於ける古い訳名もこゝには当嵌めて差支への無い様に思われる。』として、現在形と現在完了相とを同じMoodに分類している。

これは本論と見解をほぼ同じにする点である。あくまで“形態的二時制”という視点に基づく本論の主張では完了相は have の用法であり、過去分詞の用法であり、“形態的二時制”の中に収まらねばこれらは扱う項目を別にしなければならないと考えるものである。根拠としては直説法、仮定法ともに所謂“時制の一致”の屈折的影響を受けるのは have の部分のみであり、その本来、目的補語に当たる部分は影響を受けない点であり、たとえ完了時制という時制帯が存在してもそれは意味論的な影響を受けないという点である。ところで、この細江博士の“Present Tense”=『直感直叙』“Present Perfect”=『確認確述』とはなんなのかは、拙者は現在形すなわち『直感直叙』を

現在生きている我々のBODYの外界にある自身が接している環境世界の事象や扱える事実定理・法則を表現するもの

と定義し、いわゆる現在形の劇的現在用法に臨場感効果が期待されるのはこうしたことからだと考える。特に完了相すなわち『確認確述』については日本語の口語で表現すると

「……したんだあ...(それでね...)」

あるいは

「……があったんだあ...(それでね...)」

というように話の次の展開につなげるものであり時制というよりは相であろうと考える。『鬼塚の英語マニュアル』(1994)で鬼塚幹彦氏(代々木ゼミナール講師)は

“have + p.p.” は、have「関わる」と p.p.「結果分詞・過去分詞」のそれぞれの意味を一度考えた上で用いるようにします。文字どおり「具体的な結果と関わって振り返る」感じから、「その結果どうした?」という感じが出てきます(P.58)。(中略)

“have + O + p.p.”を「継続」と分類する最大の問題点は、「2時間雨が降っている」という文を

It has rained for two hours.

だけが正しいと思ってしまうことです。「その結果どうした やんだ」という感じ
になってしまうこともあります。「今も降っている」のなら、原則として

It has been raining for two hours.

とします。(P.59)

このように、完了相は話の次の展開につなげるしくみであると考えられるのである。

さて、今井邦彦/中島平三/外池滋生/

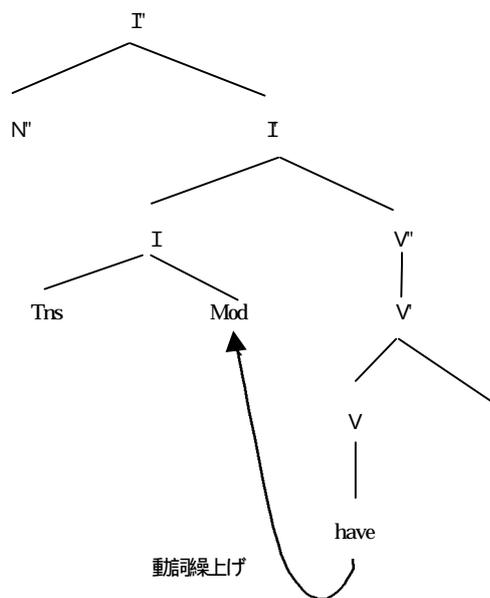
(17)

- a. Have you finished it ?
- b. Will you have finished it by tomorrow ?

(18)

- a. She has finished it , and he has ___ too .
- b. She will have finished it by tomorrow , and he will ___ too .

(19)



ここで、図(19)から、have + P.P.が時制要素(Tns)とは分離されている点、つまりいわゆる完了時制が認められていない点に着目すると、やはり完了時制は存在しないかと考えられる。同著P.32において「相動詞は時制の変化を受ける。be動詞ならば現在形ではam/are/is、過去形ではwas/wereとなり、have動詞ならば現在形ではhave/has、過去形ではhadとなる。これは相動詞の移動先であるIの下にTnsがあり、それとの関係で語形変化するためである。」とある。ここでも完了相はひとつの時制としては不完全であり、やはり完了時制は存在しないかと考えるところである。ところで、相動詞haveを元来普通動詞であると認めながら、「資格替え」などとするのは少々無理があり、これは机上のつじつま合わせに過ぎない。その時その時によって、haveの文法上の品詞が変わるのでは便利が悪いし、英文法がより複雑化してしまう。だいたい品詞などというものを一々

のを一々話者が考えているはずもない。やはり、完了相は普通動詞haveのひとつの用法として扱う方が無理がないし、わかりやすいのである。

動詞句削除についての本論の見解

「動詞句削除(VP Deletion;反復しているV"が「省略」される現象)は、V"を削除して助動詞を後に残すが、(18a)ではhaveが削除の対象からはずされて後に残っているのに対して、(18b)ではhaveが削除の対象に含まれている。」同著P.31に対し、わざわざ、相動詞を助動詞として繰上げるまでもなく「主語の次に来た動詞または助動詞(代動詞も含む)が残される」という法則であると言え足りると考える。

疑問文倒置についての本論の見解

「繰り上げられた相動詞は法助動詞と同じ振舞いをする。つまり疑問文では倒置され、動詞句削除では削除を免れる。(17b)(18b)のようにModのところには法助動詞がある場合には動詞繰上げが阻まれるので、相動詞は本来のVの位置に留まっていなければならない。そのために、普通動詞として振舞うことになるのである。」同著32に対し、わざわざ、相動詞を助動詞として繰上げるまでもなく「主語の次に来た動詞または助動詞(代動詞も含む)が倒置される」という法則であると言え足りると考える。

簡単にまとめる。

完了相の意味は日本語の口語で表現すると

「……したんだあ...(それでね...)」

あるいは

「……があったんだあ...(それでね...)」

というように話の次の展開につなげるものであり時制というよりは相であろうと考える。本論では完了相(完了形)がひとつの動詞の屈折形ではないことから文法的な時制としては認めない立場を採用する。すなわち、完了相の現在完了は現在形として扱い、過去完了は過去形として扱い、意味的尺度で文法を分けない。さらに完了不定詞も不定形として扱う。なぜなら、時制の一致や仮定法の問題を解く時に、一度その時間的文意から離れ、現在完了は現在形として、過去完了は過去形としてhave(had)のみを見て形態的に処理するほうが混乱がないからである。つまり、意味的尺度を採用すると時制の一致で従属節に現在完了が生起しない現象

I thought it was right. (それは正しいと思った)

I thought it had been right. (それは正しかったと思った)

*I thought it has been right. (それは正しかったと思った)

や仮定法に現在完了が使われない理由が説明できないからである。また同時に英語の時制は現在形と過去形と不定形の3つに絞られる。ここで不定形を除けば英語の時制は形態的に2時制であるとする立場は守られる。さらに、現在完了は現在形として、過去完了は過去形としてhave(had)のみを見て処理すると、仮定法も仮定法過去と仮定法過去完了とがひとつになることが可能になる。